



「ホホホ、逃がさないわよ！のろまな侵入者さん！」

超人的な速度にリアは翻弄されていた。

「くっ、これじゃあ敵の姿も見えない…。」

このままでは体力を消耗し、不利になる一方。

リアは最終手段を使う決意をした。左耳の装置に意識を送る。

全身を覆う特殊素材の生地が変形し、胸元や腿があらわになる。

さらに流れるエネルギーの輝きも強くなる。

「あら、色っぽい格好。お姉さん、食べたくなっちゃうわあ！」

敵は全速力でリアに向かう。

しかしリアはそれを超える速度でかわし、すれ違い棘に一撃を加えた。

「なっ…!?何っ！！？」

敵の動きは止まり、ようやく姿が確認できた。

その姿は八つの目と八つの手足を持つ、クモのようなおぞましい怪物であった。

「…蜘蛛型の生物兵器か。ここの科学者達もまたヤバそうなもの作ったなあ。」

【スピードモード】は使用者の速度を最大限にまで強化する。

しかし軽量化により肌がむき出しになり、攻撃力や防御力が犠牲になる。

リスクの大きい、最後の手段である。

リアは圧倒的なスピードで形勢逆転した。

攻撃のたび距離を置き、クモ女に少しずつダメージを与えていく。

「く、速いっ…！でも威力はそんなに無いようね！」

「あら、それはあなたも同じでしょ、オバサント！」

リアの勝利は明確であった。

持久戦に持ち込むこともできるし、出口が見つければ隙を見て脱出することもできる。

自慢のスピードを越され、軽い挑発に乗った蜘蛛女は怒り、冷静さを失う。

「キィィ！このガキ！！許さない！！！」

「よし、このまま出口を…。」

蜘蛛女から距離を取るため背後に跳躍した瞬間であった。



「！！？」

背中がアミのようなものに引っかかる。

「げ…。これって…。」

気付いたときにはもう遅く、背後の巨大な蜘蛛の巣に捕らわれていた。

「やだ、うそでしょ…！？」

リアは寒気がした。

周りを見渡せば、蜘蛛の巣が幾重にも仕掛けられていたのだ。

隙になったリアを蜘蛛女が嘲笑う。

「あらあ、残念。引っかかっちゃったわね〜♪」

スピードモードで足を取られるのは最悪の事態である。

素早さ以外の能力を犠牲にしているので、

動きを封じられてしまっは絶望的。

さらに安い桃発で蜘蛛女の怒りを買ってしまったため、

何をされるか分かったものではない。

「く、ふっ、くっ、あうっ…！」

何とかして逃げようとするが、下手にもがけばもがく程糸は絡まる。

必死に逃れようと身をよじらすリアの姿は惱ましいものであった。

その様は蜘蛛女の嗜虐心をくすぐる。



蜘蛛女はリアの背後に貼り付き、囁いた。

「うふふ、足をとられちゃったら、何にも出来ないのね…。

捕まったスパイがどうなるか、わかっているでしょうね…？」

「くっ…！」

蜘蛛女はリアの体を舐めまわすように見る。

「それにしても、随分といやらしい嗜好…。まるで風俗嬢…淫売ね。

あなたの組織は一体どんなコトさせるつもりなのかしらね？」

自分だけでなく組織への侮辱…。リアは激昂した。

「違うっ…！このスーツは、そんなことにはっ…！」

「じゃあ何なのかしら、このエロさは。」

三本の手をハイレグスーツに引っ掛け、ぐいとひっぱると



べろん。

「あっ…！」

恥部を隠している布がずれ、たわむれに実った二つの果実が露になる
股間部は性器に食い込み、キリキリアウト。

指先ひとつで、全裸より恥かしい格好にされてしまった。

「ホラ、ちょっとずらしただけでこんな格好…あなたの組織は変態ね。」

「ち…違…っ！ 違…っ…！」

リアは自分でもいやらしいと思ってしまう姿に自信がなくなってきた。

スピードモードの露出度は、常々気にしていた点でもあったからだ。

蜘蛛女はくっ、くっ、と布を食い込ませ、陰部を刺激する

「く、やっ、やめっ…！ スーツでそんなこと…！」

「あら、いつもこのスーツでやらしいご奉仕、してるんでしょう…？」

くっ、くっ、く…っ。

「こ、このっ…んっ…！」

「ゼーンブ脱がすことも出来るけど、こっちの方があなたには効きそうね。」

組織の作った、【エロスーツ】のままお仕置きしちゃう！

スーツを装着したままにするのは不利益だが、

戦闘着で辱められた方がリアには効果的なようだ。

「ほらほら、どうしたの？ エッチモードさん？」

くっ、くっ、くっ、くっ

「んっ、あふっ、く、馬鹿にっ、しないでっ…っあ…！」



蜘蛛女は直接触りだす。乳首を引っ掻き、
股にスーツを食い込ませながら手淫。

かりかりかりかり、ぐちゅづちゅつ、ぐちゅづちゅつ…

「スーツのまま弄られて、興奮して…とんだ変態スパイね…」

「ち、違うつ…！ちがうつ…！！」

エネルギー解放時の敏感化効果が災いして、
普段以上に感じてしまう。

「せっかく変身したのに…悔しいわねえ？」

ホラ、悔しくてココがこ～んなに…」

ぐちゅ、ぐちゅ

「あつ…やうつんつ…！！」

わざと水音が立つように刺激し、リア自身に愛液の音を聞かせる。

ぐちゅつ、ぐちゅつ、くぶつ、くぶつ…

「あああつ…、くつ、うああつ…！！」

「さっきは馬鹿にしてくれたわね…ただじゃ済まさないわよ～♡」

蜘蛛女の執拗で陰湿な拷問が幕を開ける…。



リアの両手両足は束ねた糸で拘束され、宙吊りになる。体操競技の「つり輪」のような格好だが、この姿勢で固定されると絶妙に恥ずかしい。

「く…人の体をおもちゃみたいに…！」

「うふふ、下から何されるか…不安でたまらないでしょう？」

下からは蜘蛛女が覗き、不安定なリアに脅しをかける。



「ホラッ！」

「きゃあっ!!!」

急に両手で尻を掴み、リアをおどかす。

「フフ…すっかり怯えちゃって…カワイイ♥」

「ツ…!…このっ…!!!」

悔しがるリアをよそに、

さわさわ、と桃尻を愛しむ様に撫でる。

「かわいいお尻…卵産み付けたくなっちゃう…♥」



指は自然とアナルに到達し、くちゅくちゅと甘いじりします。
「あつ、や、ふ、うああつ…！」
不浄の穴をためらい無く犯され、羞恥でどうかしそうになる。
それだけではない。
リアは人一倍肛門が敏感で、少し弄られただけでも



「あつ…!!!」

——軽くたんでしまう程弱い。

「あら、弱点、見つけた♥」

「あ、ああんっ…! よ、よしてっ…!!!」

クチュクチュクチュクチュ…

「よさない♥」

弱みを掴んだ蜘蛛女は執拗にアナルを責める。

「うくっ、っ…!!!」

また、イク。

「ほら、イクときには『イク』って言いなさい。」

「誰が、そんなことっ!」

「ふふ、強気な娘は好きよ…。崩したくなっちゃう。」

蜘蛛女は不吉な笑みを浮かべると、何かを用意し出す。



真下に用意されたものは

リアの身の丈ほどの長さ、ドリル状のヒダ。

そして無数の粒が不規則に並ぶ、

見るからに凶悪なディルドであった。

「や、う、うそ…」

「嘘じゃないわ～♪今からコレがあなたのおしりに入るのよ？」

こんな物でアナルを犯されては堪らない…。

リアは必死に逃げようとするが、

お尻がふりふり震えるだけで、蜘蛛女の興奮剤にしかならない。

「脅えちゃって、かわいい。大丈夫、すぐに抜がって、

気持ちよくなるから…。」

蜘蛛女は悪魔のように微笑むと

「ま、ままま待って！そんなもの、入るわけ…」

ディルドのスイッチを入れた。

「ひいっ…！」

巨根は、にゅいんにゅいん、と回転しながらゆっくりと上昇する。



「ご開帳〜♪」

強力な拘束糸の力に逆らえず、両足をくばぁ…と広げられる。

「くぅっ…！」

散々漏らした股間が曝け出され、屈辱に顔を歪める。

「あなたのアソコ、じっくり観察してあげる…。」

蜘蛛女はすんすん、と濡れた股間の匂いを吸う。

「かつ…嗅ぐなっ…！！」

さすがの羞恥にリアは抵抗する。

(拘束が無ければこんな奴っ…！)

されるがままの恥辱に、リアは歯を食いしばる。



「んっ…！」

つん、と割れ目を突き、なぞる。

「一応聞くけど、どこのスパイかなんて、答える気ないわよね？」

「…愚問ね。」

「そう…じゃあ仕方ないわね…」



蜘蛛女は無数の舌をむき出し、なめずる。

「ひっ…!!」

「あなたが喋る気になるまで、苛め続けてあげる♥」

舌は一本一本が器用にうねり、いやらしく蠢く。

「あたしのクニニは、すごいわよ…?」



「くっ…んくっ…！」

…くちゅ、くちゅ、…

無数の舌は長く、性器と肛門を同時に責めることができる。

リアはまるで複数人に股間を舐められ、挿入されているような感覚に陥り、羞恥に顔を染める。

「ホラア…こんなにされたの、初めてでしょう？気持ちいいでしょう？」

「や、やめてっ…！」

「くっ…言うまでやめな～い！」



柔らかい舌で、優しく、追い詰めるように、
徐々にリアの緊張を解いてゆく…。
蜘蛛女の舌は長く、かなり奥まで侵略する。
「あ、あふ、ふぁあつ…」
リアが間抜けな声を上げ、がら空きになったところで…



ズノノノッ!!!ビチュブチュヌチュチュッ…!!!

「ッ…!!!?あ、あひあああつ!!!」

内臓を吸い出すほどの吸引力でしゃぶり出す。
急にハードな責めにされたリアは困惑する暇も無く、
ただ絶頂するのみ。

甘責め中にいくつか発見された快感スポットを
これでもか、と言う程ごりごりしこかれ

「あっ…いくつ、いくつ…いくう—————つ…!!!」

また、潮を噴きながら、連続で絶頂する。



「うふふ、ちゃーんと言えるじゃない。」

「くっ、ううう…！」

「でも、まだ聞きたいわ。その言葉♥」

「…!!」

蜘蛛女が取り出したのは、2本の電マ…。

「まだまだこれからよ～???」

「い、いやああっ!!」



「それにしても…生意気なおっぱいしちゃってえ。」

蜘蛛女は再びリアのスーツをずらし、その乳房をまじまじと観察する。

てろん、と晒された、その年にしては大き目の、たわわな膨らみ。

先端は薄く染まり、敏感な突起を包み隠している。

「ゲームをしましょう。指一本触れずにあなたをイかせてアゲる。

もし我慢出来たら、逃がしてあげるわ。

でも、もしイっちゃったら…『おしおき』よ?」

さすがに舐めすぎな条件のゲームにリアは怪しく思った。

もしクリアしたとしても、蜘蛛女が約束を守るとは思えない。

しかし他に脱出するチャンスは無い。

「…わかった。そのゲーム、乗るわ。」

「あ、ちなみに、あなたから当たりに来た分は当然だけど

ノーカウントよ。」

「なにそれ。縛られて全然動けないっての…。」

謎のルールに少し疑問を抱きつつも、リアは蜘蛛女の提案を承諾した。



「ホラホラ、触っちゃうかもよ？ホラッ！

あつ、やばい、触れちゃいそう…！あ～っ！あ～～…っ！」
ゲーム開始早々、蜘蛛女はリアの体すれすれで手を動かし、
一人で勝手にひやひやしている。

「…？…何を馬鹿なことを…。」

蜘蛛女の不可解な行動に疑問を感じながらも、
今までひどい目に合わされ続けた蜘蛛女の手には鳥肌が立つ。



「あ〜っ触っちゃらう、触っちゃダメなのにつ…！」

蜘蛛女の手は乳首周辺に達した。

「っ…」

リアは少し焦るも、

「触れたらアウト」というルールで自分を落ち着かせる。

しかし…

(早くこの指どっか行ってっ…！)

蜘蛛女の指先はいつまでも離れず、リアの乳首を周回する。



「あなたの乳首、綺麗な色ね。うっすら染まって…」

「っ…！」

リアの希望と反し、蜘蛛女はリアの乳房について触れる。

「男ならむしろぶりつきになっちゃうわあ。

あなたの上司や同僚はきっといやらしい目で見ていますわ。

『ああ、リアの胸を、乳首を、アナルを、全てを、

無茶苦茶にしてやりたい』ってね…♥

夜な夜なアナタの戦闘服姿をオカズにオナニーしているわ。」

組織への冒涇…リアには最も効果的な責めだ。

「っ…！そんなことないっ…！」



「どうかしら?こんなに可愛い顔に大きな胸して、
周りの男が放っておかないでしょう?言い寄られたこともあるでしょう?
その男はきっと妄想しているわ。あなたの乳房を蹂躪する様を…
好きに揉みだしたり、口に含んで乳首を転がしたり…♥」

「そっ、そんなこと…」

確かにリアはその容姿と人柄から人気で、
何度か言い寄られたことはあった。
多忙を理由に毎度断っていたが…。

今までつてきた男たちは、

自分でいやらしい妄想をしていたのだろうか。

蜘蛛女の話術に乗せられ、ついそんな気にさせられ、

乳首が立ちそうになる。

その様子を、蜘蛛女はにやにやにやにや…



「…!(まさかっ…!)」

リアは蜘蛛女の作戦がわかってしまった。

このまま乳首が勃起して、飛び回っている蜘蛛女の指先に当たったとしてもノーカウント。

ふざけた道理だが、その場合「触られに来た」のはリア自身となる。

蜘蛛女はずっと同じ場所で同じ動きをしていたのだから。

後は乳首を立てるためにリアを煽るのみ。

「そういえば、あなたの組織は性的拷問への訓練があるそうね？」

どんな風にするのかしら、興味深いわあ。

どんな風に乳首を責められたの?こんな感じ??」

蜘蛛女の手は乳首の間近でシミュレーションする。

いやらしく、弄ぶような手つき。

「っ…!」

蜘蛛女はその他にも「初めての自慰行為」や

「初めてのエッチ」など、特に乳首について重点的に、事細かに聞いてくる。

リアは未だ男性経験は無いものの、妄想で自慰を完遂した事もあり、

官能をくすぐるには十分な話題であった。そして…



むく、

「…その話はもうっ…」

蜘蛛女の淫語責めによってリアはすっかりしおらしくなってしまった。

「その話って、何のかしら？」

「そ、その、ち、乳首の話は…」

むくむく、

「んー？ホラホラwwwまだ触ってないわよ〜〜？www」

「うっ…あっ…うっ…！」

むくむくむく。

これ以上勃起しては蜘蛛女の餌食となってしまう。

(やばいっ…このままじゃっ…！)



蜘蛛女のドメ——【捕食】の姿勢。曝け出された穴から体液を吸る、この体勢から逃れられた者はいない…。

まんぐり返しというただでさえ恥辱的な格好に、露出度の高いスピードモードでは恥かしさはまたひとしお。

尻が締まらない完全無防備な姿勢にリアは本能レベルで恐怖を覚える。

「さあ…これであなたもオワリよ…？」

「ひっ…やっ、やだああっ!!!」

蜘蛛女は恐怖に引き摺るリアを味わうように、全身を愛撫する。

「やっ、あつ、やあああつ…!!!」

顔は正面に固定され、蜘蛛女に顔がよく見えるように強制される。

「アア…そう、その顔…堪らないわ、もっと見せて頂戴…」

蜘蛛女は恐怖に引き摺るリアの顔をねっとり撫で回す。

「や、あ、あああ…」

「無様ね…のろまな侵入者さん？」